
J E C の源流と歴史的遺産 1

- 三つの要素と J E C -

一宮基督教研究所 安黒務

J E C 理解の鍵

日本福音教会 (J E C) は、英語でジャパン・エバンジェリカル・チャーチーズと表現されます。「日本」と「教会」の部分は分かりやすいのですが中心にある「福音 (エバンジェリカル) 」という部分はあまり理解されていません。しかし、この部分を正しく理解することこそが J E C 理解の鍵なのです。

J E C の全体像

目の見えない三人が象の一部分を触って「象とはホースのようなものだ」「象とは柱のようなものだ」「象とはロープのようなものだ」と証言したそうです。これは正しい象の姿を表現しているのでしょうか。私は信仰者としての初期に「ウォッチマン・ニーの『キリスト者の標準』を読んだことのない人は J E C のメンバーと認めたくありません。」と聞かされて「 J E C とは十字架のメッセージの群れなのか? 」、聖霊カリスマ・セミナーで聖霊のバプテスマ (もしくは満たし) の経験すると「 J E C とはカリスマ的な群れなのか? 」、スウェーデン宣教師の背景はスウェーデン・バプテスト諸教会と知ると「 J E C とはバプテストの流れなのか? 」等々。私の J E C 理解はその時その時に「カメレオン」の皮膚の色のように変化しました。そのような J E C の一員である私たちにとって「 J E C 」の一部だけではなく、その全体像を知るとはとても大切なことです。私は J E C の全体像を理解するためのキーワードは「エバンジェリカル」であると思います。そこで、日本福音教会の名称の中心部分にある「福音 (エバンジェリカル) 」について十二回に分けて解説させていただきます。

エバンジェリカルの意味

私は「福音 (エバンジェリカル) 」という意味には「イエス・キリストの死・葬り・復活の福音を単純に信じる」という素朴な意味と、「福音主義神学に立つ」という神学的な意味があると思います。私は K B I で「福音主義神学」という科目を担当しています。それは「福音主義キリスト教と福音派」(宇田進著) を基本テキストとして「神学生一人一人の所属教派の信仰の源流と歴史的遺産を探求する」ことを課題にしています。そこで教えられてきたことは、 J E C とは二千年の教会史において幾重もの発展や発達過程を経て生成を見るに至った生きた実

体であるということです。

三つの重要な要素

それでは、二千年の教会史における「J E Cの源流と歴史的遺産」を以下の三つの要素に注目しつつ見てまいりましょう。まず第一に、最も根本的な要素として**神学的・教理的要素**があります。つまり、何を信じているのかの問題です。J E Cは「聖書信仰」に立っていると主張されますように、**穏健で中庸な、バランスのとれた一定の神学的立場**に立っています。第二に、**歴史的要素**があります。J E Cの背後には、**カリスマ運動、ケズィック運動、バプテスト運動、会衆派ピューリタン運動、等々の特定の歴史的運動**が存在しています。よく「現在の根は過去に深く根ざしている」とか、「教会の歴史は現在を解明する」といわれるところです。第三に、**社会的、文化的要素**があります。J E Cという現象は歴史における一つの社会的・文化的現象という一面を持っています。区別できるJ E C独自の行動様式を分析することによって、J E Cの立体的な把握を得ることができます。

J E Cの源流と歴史的遺産 2

- 使徒的キリスト教とJ E C -

一宮基督教研究所 安黒務

J E Cの源流と歴史的遺産 3

- 古代教会の正統信仰とJ E C -

一宮基督教研究所 安黒務

J E Cの源流と歴史的遺産 4

宗教改革の三大原理とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E Cの源流と歴史的遺産 5

宗教改革における四つの流れと J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の源流と歴史的遺産 6

16, 17 世紀の信条と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の源流と歴史的遺産 7

17 世紀の正統主義神学と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の源流と歴史的遺産 8

敬虔主義の遺産と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の源流と歴史的遺産 9

自由教会と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の源流と歴史的遺産 10

近代のリベラリズムと J E C

一宮基督教研究所 安黒務

J E Cの源流と歴史的遺産 11

ミラード・J・エリクソン博士とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

エリクソン博士とJ E C

この一年、使徒的キリスト教からはじめて「キリスト教二千年の歴史的展開」をおおまかに概観してまいりました。今回と次回（最終回）は、「J E Cの源流と歴史的遺産の集大成とも言うべき組織神学書」を著述し、また「私たちの時代における最も尊敬されるバプテストであり、福音主義の神学者である¹」といわれるエリクソン博士とJ E Cについて考えてみたいと思います。

エバンジェリカルとしてのJ E Cの神学の特徴

エバンジェリカル（福音派）としてのJ E Cの神学は、源泉への姿勢、つまり歴史的教理的ルーツとそれとの連続性を何よりも大切にすることを特色としています。このことは、具体的には、「聖書に書いてあるとおり」（コリント 15:3,4）をその展開の究極の原点とすることをはじめとして、公同信条に表明され、「あらゆるところで（公同性）、常に（古代性）、すべてによって（一致同意）信じられてきた」古代教会の正統信仰、16世紀宗教改革の神学、近世の福音主義諸信条、17世紀プロテスタント正統主義、ピューリタニズムを含む近代の敬虔主義と信仰復興運動との深い結びつきを常に意識しています。そしてさらにより近い歴史的ルーツとしては、...基本的に宗教改革の立場を強調していた19世紀中葉の英国プロテスタントの基本的反映と見られる前回記述しました福音主義同盟の9箇条ならびにローザンヌ誓約を共通に認めていると表現することができますⁱⁱ。そして、このような基盤の上にたって、この50年の「十字架のメッセージ」や「聖霊経験への強調」がありました。

J E Cの特質、それを組織神学のかたちで表現したとしたら

それでは、以上のような伝統に沿って、エバンジェリカル（福音派）としてのJ E Cの神学はどのような組織神学的位置づけができるのでしょうか。19世紀後半から21世紀初頭までのエバンジェリカル（福音派）における神学研究を概観してみますと、欧米中心に多くのすぐれた神学者が活躍して

います。また教派別にみますと、改革派系、聖公会系、バプテスト系、ルター派系、ウェスレアン系、ディスペンセーション主義系等の**多様な組織神学書**が出版されてきましたⁱⁱⁱ。それらの中で、日本の福音派の神学的重鎮のひとりであられる宇田進師が最も高く評価されている組織神学者のひとりが**エリクソン博士**であり、彼の主著「**キリスト教神学**」です。この書物は、今後 J E C、K B I を含め日本の福音派において教派を越えて「**基準的な組織神学書**」として用いられていくことが期待されています。それが「いのちのこば社」から出版されるゆえんです。

私の書齋にはかなりの数の「組織神学書」があります。そしてある時、K B I の高橋昭市師から「安黒先生、組織神学を教えてくださいませんか。」と言われましたとき、洋書でありましたが迷うことなくエリクソン博士の「キリスト教神学」を選びとりました。どのような組織神学書を使用するかで、その群れの**神学的特質が50年間規定される**と確信していたからでした。そしてその研究に没頭して今日まで導かれてきました。彼は私たちと同じくスウェーデン・バプテストの流れをルーツとするクリスチャンであり、**福音主義とバプテストの遺産**を忠実に**継承・深化・発展**させている神学者です。彼の主著「キリスト教神学」の至るところにみられる「**スウェーデン・バプテストの特質**」は、まさに「**エバンジェリカル（福音派）としての J E C の神学的特質**」を組織神学のかたちで表現したら、このようになるであろう。」と心底から納得させるものです。くすしくも J E C の教職者がその**翻訳**を受け持つことになったのも、また以下に紹介します「**関西における二つの来日講演**」の**受け皿**となりましたのも、あながち“偶然”ではなく、**神の摂理の御手のなす“必然”**、と言えるのかもしれませんが。

J E C 拡大教職者会：それは、J E C の“空気”にかたちを与える時

最初に、3月11日に西神・中国ブロックの教会が主催します「**J E C 拡大教職者会**」の意義・目的を説明させていただきます。

古代中国の戦争体験を集大成した**孫子の兵法書**には「**彼を知り己れを知らば百戦あやうからず**」とあります。J E C の特徴は「**十字架と聖霊**」という言葉で表現されます。しかしそれだけでは J E C の一部分を理解したにすぎません。J E C の宣教母国の教派的背景はスウェーデン・バプテスト系諸教会であり、私たち J E C は**スウェーデン・バプテストの特質**をあたかも“**空気**”のように無意識に継承しています。今 J E C は宣教50周年を節目に、**新たな50年の進路**を見渡しています。それゆえ、それらの**歴史的・教理的遺産**を正しく自覚しまた評価して**継承・深化・発展**させていくことが必要と

されています。

まさに、そのような時に、エリクソン博士の主著『キリスト教神学』が出版されることとなり、またその出版を機会にご本人をお招きできることとなりました。博士は「教会への献身を伴って聖書的な主題を強調する神学は、バプテスト的な主題を強調する神学を生み出す^{iv}」と語っておられます。このことはJECの神学が福音派全体の共有しうる公同的な神学的特質を宿しており、日本の福音派の中で穏健・中立・公平な座標軸的位置にたちうることを意味しています。またそのことにより、日本の福音派の中でますますかけがいのない貴重な群れとなっていける可能性を秘めていると思います。私たちJECが、この神の時を生かし、さらに「己(おの)れを知る」機会とさせていただき、「エリクソンの神学をJECの神学の座標軸として」福音派の諸教派と連携を深め、宣教と教会形成と神学教育における共同戦線をより一層強化していくことができると願っています。

関西講演会（一般公開）：あなたも神の創られる歴史の目撃者の一人に！

第二に、3月12日にKBIで開催される「関西講演会」の意義・目的を説明させていただきます。

この関西講演会は、主の恵みにより「福音主義神学会・西部部会春の研究会」をいつもより一ヶ月繰り上げていただけることとなり、福音主義神学会西部部会と関西聖書学院の共催のかたちで開催されます。関西の福音派の神学校・大学の代表的な先生方が勢ぞろいされ、集会の奉仕を助けてくださいます。ひとりの神学者の講演に関西のみならず全国規模でこのような協力がみられるのは、あのピリー・グラハム大会以来かもしれません。集められる数では比べようもありませんが、福音派の神学に将来にわたって与え続ける影響・質的内容という点では、それをはるかに凌駕しているといっても過言ではないと思います。エリクソン博士は「牧会者のハートと学者の知性をあわせもつ神学者^v」と評され、その分かりやすい語り口は世界的名スピーカーとしての評価の高い方です。それゆえ教職者のみでなく信徒の方々にも有益な講演会になると思われます。ある神学者は、「組織神学書は電話帳を読むようにではなく、讚美歌を歌うようにさせなさい。」とアドバイスしました。博士の「キリスト教神学」はまさに「魂のこもった讚美歌を賛美している^{vi}」かのように分かりやすく、しかも高度な内容です。米国では、福音派系キリスト教大学・神学校、そして教職者と信徒の方々の間で教派を超えて基準的組織神学書と高く評価されているものです。

今回の講演会では、著者自身の口から、主著「キリスト教神学」における

問題意識、そしてその今日的意義を語っていただきます。さらに聞くのみではなく、その価値を認め神学校の講義で用いている日本人教職者による「キリスト教神学」の本質をついたレスポンスと、さまざまの観点からの有意義なディスカッション、そして全体総括へとひとつの流れとなって展開していきます。この講演会は「単なる講演会ではなく、日本の福音派の教職者が、そして信徒の方々が『キリスト教神学』をどのように受けとめ、どのように活用していくべきかの21世紀の神学的指針」を提供する場となることでしょう。ご期待ください、そしてあなたも参加し、神が創られようとしている歴史の目撃者となってください。

J E C の源流と歴史的遺産 12

- 結び -

一宮基督教研究所 安黒務

J E C の神学的特徴：歴史神学の視野から、そして組織神学の視野から

一宮基督教研究所の使命の一環として紙面をいただき、この一年間「J E C の源流と歴史的遺産」のシリーズを連載させていただけましたこと、そしてJ E C とJ E C を越えた多くの方々、多くの教会から「一宮基督教研究所」の働きに対する支援献金や資料購入の依頼を受けてきたことに心より感謝申し上げます。また意図したわけではありませんが、この三月に連載の終了にあわせるかたちで「J E C の組織神学書」とも言うべき、拙訳の「キリスト教神学」がいのちのことは社より出版されることにも神さまの不思議な導きを感じています。

さてここまで、K B I での「福音主義神学」の講義の蓄積をベースにして、二千年の教会史における「J E C の源流と歴史的遺産」を神学的・教理的要素、歴史的要素、社会的・文化的要素において見てまいりました。これらの記述を通しJ E C の立体的な把握を得る一助としてくだされば感謝です。今回は“歴史神学の視野から”J E C の神学的特徴を眺望しましたが、また機会がありましたらK B I での「組織神学」の講義の蓄積をベースにして“組織神学の視野から”J E C 神学的特徴についてご一緒に学べたらと思っています。

J E C とエリクソンの神学：良き伝統を継承・深化・発展させる軌道の敷設

J E C 50 周年記念誌小論文として「私は21世紀におけるJ E C の神学のあり方・方向性というものを真剣に考慮していくとき、“ミラード・J・エリクソンの

神学"を無視することはできないと思います。私の提案としてですが、『エリクソンの神学を JEC の“**神学的座標軸**”と**位置づけ**、その下に JEC の過去と現在の霊的遺産を適切に**整理**し、そして今後展開してゆくであろう種々のムーブメントを適切に**関係づける**』というかたちで、JEC の流れの中のよきものを**継承・深化・発展**させていく軌道を敷設することができると思います。」と書かせていただきました。

毎年この季節に K B I 神学生の卒業論文を読ませていただき感謝していますことは、「人間論」「聖化論」「教会論」等の卒業論文において「エリクソンの組織神学の学びを“**神学的座標軸**”とし、その座標軸の中に神学生個々人の**問題意識**や**所属教派の理解**を**位置づけ**、クリティカルに**評価**し**新たな提言**をする力が神学生の間に増し加わっている」ことです。神学生の皆さんにこのような力が身につけていることは、神学生それぞれが所属している教派の伝統のうちの良きものを**継承・深化・発展**させていく力がついていることを証ししています。私は神学生に「皆さんは、それぞれの**所属教派の未来を担う**人々なので、手抜きをせずに、世界的スタンダードな組織神学書である、このエリクソンの『キリスト教神学』をしっかりと学んで、**バランスのとれた神学的な座標軸**を身につけてください。」と常にチャレンジし、毎月のように「エリクソン神学」の各論における**レポート**を提出してもらっています。最初は慣れない人もあり、不平不満もありましたが、今ではそれぞれの力量に応じ、自発的かつ積極的にかなり**充実したレポート**が提出されるようになってきています。神学生がこの**学びの意義と真価**に目覚めてきている証拠です。

K B I といいますと、これまでは「ペンテコステ・カリスマ系で**伝道熱心**ではあるが、**神学教育**では見るべきものがない。」というのが、福音主義神学会や保守的福音派の人々の誤った評価でありました。しかし、今回のエリクソン博士の書籍翻訳と講演会を契機として「K B I と J E C とは、ペンテコステ・カリスマ的経験にオープンでありつつ、**エリクソン博士の『キリスト教神学』を座標軸にする群れ**である」ことが公けのものとなり、**神学の内実**においても高い評価を受けつつあります。

J E C はまもなく「**日本福音同盟 (J E A)**」に加盟しようとしています。そしてその先には、日本福音同盟の独立した神学研究部門ともいえる「**日本福音主義神学会 (J E T S)**」への入会が視野に入ってきます。私には夢があります。それは、「将来 J E C や K B I 卒業の教職者の中から**福音主義神学会**^{vii}で活躍し**貢献**していく**多くの人材**が育っていくこと」です。それは**神学と実践の両面**における**バランス**を重んじる J E C と K B I の**ビジョン**にもかなうことです。“**雨後のたけのこ**”のように新しい神学校が作られては消え、消えては作られる、神学校の“**サバイバル (生き残り)**”競争の時代において、今 K B I は**宣教のパトス**(情

熱)に満ちた大田院長の下、諸教師方とともに充実した**神学のロゴス**(論理)を提供する神学教育を目指してまい進しています。ペンテコステ・カリスマの経験にオープンでありつつ、このように神学の面でも充実し**バランスのとれた神学校**を日本では他に見出すことはできません。

“継続神学教育機関”としての一宮基督教研究所の新たな挑戦は続きます

私は今後、邦訳されたエリクソン博士の「**キリスト教神学**」が、K B Iにおいてだけでなく、J E Cの各教会の**聖書研究会**や信徒リーダー・C S奉仕者の方々の**メッセージ準備**に、また「**組織神学的瞑想**」として信徒の皆さんの**個人的なデポジション**において用いられていくことを願っています。J E Cの総会においては、我喜屋師・道本師・富浦師の歴代の理事長が、スウェーデン・オレブロ・ミッション(現在のインターアクト)の**良き伝統の継承**を語ってこられました。私もまた、オレブロの宣教師が開拓され、J E Cの第一世代の教職者の先生方が築きあげてくださったJ E Cの群れ、またK B Iの学び舎が、J E C・K B Iの**神学の集大成**としての「**キリスト教神学**」を通して伝統の中の良きものを**継承・深化・発展**させていくことを切に祈っています。「**一宮基督教研究所**」の機能もその線上にあります。教会でもなく、聖書学校でもなく、宣教団体でもありませんが、神さまからの**特別な召しと賜物**をいただいている**ユニークな働き**であると信じ、J E CとK B Iの“**継続神学教育機関**”としての一宮基督教研究所の新たな挑戦は続きます。引き続き、この小さな働きを覚えて祈り支えていただければ感謝です。

補記

日本福音教会(J E C)並びに関西聖書学院(K B I)とエリクソン博士との関係について補足させていただきますと、日本福音教会(J E C)は旧スウェーデン・オレブロ・ミッション(現在インターアクト)の宣教師によって伝道・教会形成された群れです。旧**スウェーデン・オレブロ・ミッション**はスウェーデン・バプテスト系諸教会を基盤としています。

エリクソン博士は、米国の**バプテスト・ゼネラル・カンファランス**(旧スウェーデン・バプテスト・ゼネラル・カンファランス)に所属しておられる神学者です。そのルーツはスウェーデン・バプテストの諸教会です。日本での直接的なつながりは、**日本バプテスト教会連合**の諸教会がバプテスト・ゼネラル・カンファランスの宣教師の宣教によって伝道・教会形成された群れです。今回の来日講演を機会に開催されました浜松における「**日本バプテスト教会連合教職者セミナー**」に「**翻訳者**」また「**関西講演のコーディネーター**」として参加させていただき、親しく交わらせていただきました。「**カリスマ問題**」において意見の相違はあ

るかと思いますが、私の期待としましては、歴史をさかのぼれば同じルーツをもつ「スウェーデン・バプテスト系の群れ」なので、今後「エリクソン神学研究」において交わりを深めさせていただければと考えています。

i D.S.ドッケリー編集「福音主義の思索における新しい次元」、『ミラード・J・エリクソン：教会のための神学者』、p.20

ii 熊澤義宣、野呂芳男編「総説 現代神学」日本基督教団出版局、1995、宇田進『現代福音派教会の神学』p.197

iii 前掲書、pp.198-205...戦前・戦後の福音派の著名な組織神学者と著作の解説。

iv 前掲書、p.21

v 前掲書『ミラード・J・エリクソンの著作についての文献的エッセイ』、p.443

vi 前掲書、p.19

vii 「**日本福音主義神学会**」...1970年4月の創立以来、日本福音主義神学会は聖書信仰に立つ福音主義諸教会の健全な成長と発展を願い、その神学研究を助け、相互の交わりを図っています。活動は、西部・中部・東部の各地区で**春季と秋季の研究会**、隔年に**全国研究会議**、学会誌「**福音主義神学**」が毎年発行されています。教職者・信徒・神学生それぞれの立場で入会ができます。希望者は安黒までお問い合わせください（推薦人にならせていただきます）。